

フレーベル「母の歌と愛撫の歌」における 表現教育への一考察

宮 崎 恵

A Study on Fröbel's "Mutter und Köselieder"

—Suggestion to expressive activities—

Megu Miyazaki

はじめに

幼稚園教育要領の改訂に伴い、新しい領域として「表現」が設定された。この領域は、豊かな感性を育て、感じたことや考えたことを表現する意欲を養い、創造性を豊かにする観点から示されており、子供たちの日常生活の中に見られる様々な表現への欲求を、自分なりに無理なく満たしていく態度を育て、表現内容を充実させるためにイメージにあった適切な表現の技術を伸ばすことをねらいとしている。

表現とは、内なるものを表に現すことであり、情緒や感性と関わりながら生じるごく自然な活動である。表現の豊かさは子供の心の豊かさの反映であり、表現の育ちは心の育ちに他ならない。

子供の内面世界を豊かに育むこと、感覚的・直感的・情緒的な要素を適切な表現へと導き、子供の活動欲求や創造性を伸ばし高めること、これが領域「表現」の目標であり、また保育全般の目標とも重なるものであろう。

本稿では、子供の内面世界の教育、感性の教育について、フレーベルの教育学、特に「母の歌と愛撫の歌」(Mutter und Köselieder)により示唆を得ようとするものである。

1 フレーベルの教育学の概要

F・フレーベル(1782~1852)は1826年、彼の教育思想の全般を明らかにした「人の教育」(Menschen-erziehung)¹⁾を出版し、ドイツ・ロマンティック哲学に基づいた独特の世界観を展開している。フレーベルによれ

ば、「すべて天地間の万物の中には、一つの永久不滅の法則が存在し、これが万物をいかし、しかもこれを支配している。その法則は、外界すなわち自然にあっても、内界すなわち精神にあっても、また内外両界の結合としての生命にあっても、同様に常に明瞭に現れている。…万物を支配するこの法則の根底には、あまねく万物に通じ、自ら明瞭な、生きた、自覚的な、したがって永久に存在する統一者が必然的に存在する。……統一者とはすなわち「神」である。」²⁾といった万有在神論(Panentheismus)である。

すなわち、万物の中に神が宿り、働き、支配しており、万物は神の中に、神によって安らい生き存続しているという世界観であり、フレーベルの思想の中核をなすものである。

彼の活動の時代は、カントをはじめとし、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルへと発展していったドイツ・ロマンティック哲学の最高潮期にあり、フレーベルは種々さまざまな影響を受けたと考えられる。ロマンの人間は常に自然と精神とを一体に見ようとし、現実を現実のままで満足するのではなく、その内に秘められているもの、又は超現実的なものを求めようとする。したがってロマンティックの立場に立つ教育観は、常に人間の内なる永遠なものに眼を向け、人間と自然との関係を吟味し、問題にする。フレーベルにおいても人間は有限なものにおいて無限なものを見、見えるものにおいて見えないものを見、感覚的なものにおいて超感覚的なものを見ようとしている³⁾。

フレーベルによる人間教育の目的は、万有在神論にもとづいて、万物には「神性」が宿っているのであるから、万物はその「神性」を外へ表現する使命があること

を自覚すること、すなわち人間もその「神性」を自覚的に、自由と自己決定とでもって生活の中に実現し表現することである。フレーベルのいう「神性」とは、自己創造的な本質としての神性、すなわち、たえず自ら創造してやまない実在、生命に満ち生命を生みだすところとしての神性を意味している。フレーベルの人間教育は、神と人間と自然との調和と統一を意識し、永遠なものへのあこがれ、精神的なものに満たされ、しかも絶えずものを創造し産みだす人間を形成することである⁴⁾。

このような考えのもとに、フレーベルは1837年「幼児と青少年の作業衝動を育むための学園」を開設し、種々の教育遊具 (Spielgaben「恩物」) を考案し製作した。そして、彼の思索も活動ももっぱら幼児教育にかたむき、全力をあげてこの分野に集中したのである。1839年「幼児教育指導者講習科」を設立し、講習生のために6歳以下の幼児約40名を集めて「遊びと作業の教育所」を付設し、1840年、これを「幼稚園」(Kindergarten) と呼んだのである⁵⁾。幼児教育の指導講習を受けるものは、はじめは主として男教員であったが、フレーベルは幼児教育と女性との関係をしだいに深く考えるようになり、ついに幼児教育を女性の天職であり、使命であると確信するにいたったという。さらに教育の対象も、幼稚園と遊具の使用によって特徴づけられる年齢期を経て、ついにはもっと幼い時期の子供へと向かったのである。子供が一定の遊具と交わることによって諸々の力が発達する年齢より以前のもっと幼い時期、そこでは子供自身の身体がいわば遊具として作用すること、自分の四肢と感覚を使いこなすことによって外界を認識し、意識的形成がなされることに注目したのである。こうした連関で生まれたのが「母の歌と愛撫の歌」1844年である⁶⁾。

2 「母の歌と愛撫の歌」の内容

「さあ、わたしたちの子供らに生きようではないか！」(Kommt, lasst uns unsern Kindern leben!) の力強い叫びと共にこの書ははじまる。真の人間教育の出発点、その最も純粋な根源は母であり、神と一致した敬けんな心を持ち、その子との内的一致を図るべく、歌と遊びで子どもの心を聡明と多方面な生命の調和とに向かって育てようと努力する母の姿を表しながら、母性の教育と幼児教育の使命とを意識させ、自覚させようとした母のための教育書である。

“無邪気な遊びにもしばしば高い意味がある” と、添え書きがあるように、母と子のいわゆる手遊びや身体遊びなど―「身体と四肢および感覚の遊戯の歌」⁷⁾―を通

して、女性のうちに眠っている母性らしい心情を呼びさましつつ、世の母親たちに各自幼いものの魂を目覚まし醇化し育成させ、あるがままの自然の生活の底を流れるもの、その自然の生活を存続させるゆえんのものを感じ得させる事にあると考えられている。

この書の構成は、7首の「母の歌と愛撫の歌」と49首の「遊戯の歌」、1首の「結びの歌」とその各々の歌の説明とからなっている。

はじめの7首は、初めての子を見つめる母の感情、子どもと生命の一致を感じる母、わが子を見て幸福を感じる母、また子と遊びながら育ちゆく子を眺める母の感情などを表現している。フレーベルによれば、子は母にとって無上の喜びであり、神性を持った宗教的存在である。そして、「父なる神さま 生命の永遠の泉よ その泉を この子のためにもその流れを 勢いよく清くすきとおるように お放ちください 私たちはあなたの子どもです―あなたの家族です それゆえ 私たちがいつもひとつの愛であなたに結ばれていますように」⁸⁾ といった表現で、神と子と母との一体感を自覚させ、さらに「神と、そしてあなたの子どもとの一致を感じているお母さん！あなたの子どもを外界や人類や自然との生き生きした関係の中で、すべてのものごとの根源であり父である神との一致を望みながら、その子自身を統一したものとして教育すること、神の子として教育し、教育して神の子とすることが、お母さんにとって最高の生涯の任務であり、また最高の喜びである」⁹⁾ という教育的自覚へと到達させようとしている。

我が国のフレーベル研究の第一人者である荘司氏は、「これは神と子と母との三位一体観で、この三位一体観がフレーベルの母性教育学の基礎である。彼にいわせると、世の母は単なる本能的な母性愛だけではなくて、わが子を社会の一員として、また神の子として敬しつつ育てなければならない。愛しつつ育てることを愛育というならば、敬しつつ育てるのは敬育である。この教育こそフレーベル教育学の根本精神である」¹⁰⁾ という。

次の49首の「遊戯の歌」は、母の手引きとなるべき格言を与えながら、子にむかってうたう歌と、歌の意味を表すロマン的な挿絵と、各々の歌が遊びや絵に現れている教育的な意味についての象徴的な説明が加えられ、母と子が共に楽しみながら行う遊びが紹介されている。そして、幼いものの身体・四肢・感覚器官の強化と発達からそれを使用することへ、ものごとに気づくことから、中身を知り認識することへ、注意して見ることから観察と静観とへ、個々のものを知ることから普遍的なものの発見や関連性を結びつけることへ、健康な身体や四肢お

よび感覚の生活から健康な精神生活へと導くよう意図されているのである。例えばこのようである。

一塔の風見一より

子どもに新しいことをわからせるには、
まずまねをさせなければなりません。
子どもが身近なものを喜んで、
すぐまねをしたがるなら、
それが深い基礎となるのです。

塔の風見のおんどりが風や嵐に向きをかえるように
ぼうやも手の向きをかえられる
ほら！うれしいね

この遊びには、(手の関節とひじの運動を練習する遊び)という括弧つきで、次のような説明が付いている。「子どもの腕をできるだけしっかりとまっすぐ立てさせ、両手を同じ方向に広げさせます。四本の指がにわりの尾で、手のひらが胴体、おやゆびは首と頭というようにひろげさせるのです。その姿勢で、お母さんがその手向こうへ動かし、こちらへ動かしさせてやります」

非常に簡単な手遊びであるが、フレーベルが意図しているのは単に手の機能を高めるための訓練といったものだけではなく、手を動かして表現している対象に現れている、見えないことからについての仕組みに子どもが興味を持つ点である。

フレーベルによれば、子どもには、ひとつの結果にはある根源があり、影響をあたえるものには原因となるものがあることを感じる事ができ、またそれがわかるという喜びがある。そしてやがて、いま目の前でいきづいているものには、すべてその生き生きした生命をあたえる力がその根底に働いているという結論に到達するという。そしてそのために、次のような言葉を指示している。「目に見えないただの風のようなものでも、力が合わさって大きくなれば、たとい目にみえなくとも大小さまざまなことをひき起こすことができるのです。わが子よ、この世の中には、こんなふうに、感ずることはできても目に見えないものがたくさんあるのですよ。それから、感じたり目で見たりできても、言葉で説明してわからせることができないことがたくさんあるのです。ほらごらんささい、おまえの手は動くけれど、その手を動かしている力を見ることはできませんね。だからおまえが力のもとを見たいと思ったら、動かす時に注意深くやってみたり、じょうずに動くように練習してごらんささい。やがて、そのうちに、その力そのものを見ることはできなくても、その力がどこからくるのか、おまえにも

だんだんわかるようになるでしょう」このような仕方で、フレーベルは子供の身の周りの具体的な生活を扱った遊びを次々に提示しているのである。

フレーベルの乳幼児教育における特徴に、「予感」(Ahnung)の概念が挙げられる。フレーベルは、ルソーやペスタロッチと同様に感覚教育を重視したが¹¹⁾、もっと根源的に子どもが認識する能力として、対象を細かくは分析できないが、感情全体を包みとって、ぼんやりであるけれども対象のイメージを心に刻む、そういう作用があることを感じて、その能力を「予感」と呼んだといわれる。

予感概念は、フレーベル独特のものであり、本質的な認識の根底にあって体全体でおぼろげな感情をふくめて感じとる力を指し、これが人間の、特に乳児にあるので、乳児といえども、教育の対象にならないどころか、最も深い意味において影響を受けるのだという。

感覚は分化されることによって一層明確なものになるが、五感が十分に分化されていない乳幼児期においては、五感の基底に横たわる根源的な能力が、つまり諸感覚の基礎となる共通の能力＝予感が活発に作用すると考えられる¹²⁾。

フレーベルは、これらの遊戯の歌を通して、母と子が緊密に交わって四肢と感覚を訓練し、さらに予感にみちた象徴的な仕方では子供を生への理解と世界理解へと導き入れるよう定めているのである。

先に例をあげた「塔の風見」でいえば、単なる手の運動・無意味な身体運動にすぎないのではなく、同時に何かを意味しているのである。それは風にはためく風見鶏であり、洗濯物であり、旗であり、そしてそれらを動かしている力である風を象徴している。このようにして子供が、自分の身体に即して同時に外界のできごとを理解することを学ぶようにしているのである。

この書の歌と遊びによってフレーベルが意図した外界認識および感覚教育は、非常に象徴的なものであるが、それは、幼い子たちには、客観的かつ合理的な意味づけとは遠くかけ離れているが、漠然とその意味を感じとることができ、そしてその意味づけが自己の世界を主体的に構築していく過程においてきわめて重要な意味を持つと考えていたからである。そこで、感情とか予感とか勘とかに訴えて象徴的に理解させることが適切であると考えたのである。

3 「母の歌と愛撫の歌」が示唆するもの

フレーベルによれば、子供の四肢は、その子を常に新

しく自己創造しようとする周囲のものと結びつける役割を果たし、また感覚は、いろいろなことを印象づける感覚世界と子供とを結びつけるものである。子供の中に起こり始めた自己感情、その子の中に芽生えつつある予感や精神は、その子と、生命としてあらわれ生命としてあらわされるすべてのものとを結びつける役割を果たすのである¹³⁾。

「遊戯の歌」で扱われている身体や四肢の遊びは、機能的な発達からそれを使用することによる外界認知へと、また遊びが象徴しているものを通して、自然現象を注意深く観察したり人間の生活に気づくことへと進め、外面的なものから内面的なものを育むこと、予感に満ちた豊かな感情が育まれることを知らせているのである。

前述の「塔の風見」をはじめとして自然現象への注目に関するものには「小さな男の子とお月さま」「二歳まへの女の子とお星さま」「壁にうつる光の小鳥」「窓」等があり、風や光、影といったものに対する観察とその根底にある力を感じとるようにさせている。五感（視覚・聴覚・味覚・臭覚・触覚）に関するものには、「味の歌」「指ピアノ」「小うさぎ」「においの歌」等があり、「味の歌」の説明に「感覚をとおして子供に自然を知らせなさい。感覚から心の門はひらきます。しかし心をひき出して光にあてるのは精神です。……感覚を育てなさい。そうすればあなたの幼子が、いつかは多くの苦しみや悩みを避けることができ、それに明るさと意欲と喜びさえ望むことでしょう」¹⁴⁾とあるように、味覚といった単に感覚的なものにおいても人間の精神的なものが高まることへと導いている。また、四肢・身体の機能的発達のために「足をばたばた」「ぱったりこぼろやがころぶ」「親指のごあいさつ」等で遊ぶなかにも、外からの刺激で心の内の生命を養うこと、子供の感情や感覚や予感を目覚めさせることを促している。生き生きしたものを見たり感じたりすることから活動的な欲求を呼び起こすものに「小さな魚」「鳥の巣」「はとの家」等があり、身のまわりの人間の生活に関するものは「草刈り」「お菓子づくり」「炭焼き小屋」「大工さん」「車屋さん」「建具屋さん」「店屋と女の子」等がある。

こうした子供をとりまく具体的な生活を通して（歌と遊びで）意図されていることは、自然の中の活動的な生活を見つめることによって自分も同じように自由に動けることを感じたり、自然や人との関係が有機的につながっていることを感じるによって生命の調和と統一を予感し、神の存在を知ることにある。莊司氏の言葉を借りれば「実際自然の生活において超自然的なものを、感覚的なものにおいて超感覚的なものを感得させようとし

て、母はあるいは詩により、あるいは歌により、あるいはまた遊びによって幼いものに呼びかけます。これは美によって聖なる世界に幼いものを導こうとするのがフレーベルの意図であるとも言うことができる」¹⁵⁾のである。

このようにフレーベルは子供たちに神の存在を知らしめ、同時に宗教的感情までも養おうとしていることが十分読みとれるのであるが、ここで着目したいのは感覚や予感が精神的なものそのものを非常に豊かに、象徴的に育むという作用である。フレーベルは様々な歌や遊びのなかで、感覚の発達はやがて情操と精神を発達させ、ひいては実行力への意志を目覚めさせ上でも重要であることを述べている。そして特に乳幼児期は外界のすべてのものを吸い込む時期（乳児を Saugling と呼ぶ、Saugen とは吸うという意味を持つ）であり、言葉が分からなくても親や周囲のものや、人間のすることを飲み込み、飲み込むだけでなく見こむ、聞きこむのであり、「いわば彼は全身悉く、獲得する眼（Augen）なりといえる」¹⁶⁾というように、この時期の子供の予感能力のするどさを強調し、その方法として歌や手指の運動を用いたのである。

以上、この書から読みとるものは、単純な遊びの中にも深い精神的意味が含まれており、人格体としての乳幼児を、単なる物の世界でなく精神の世界へと導けること、精神（内的世界）のためには四肢・身体の運動による感覚訓練を通した予感的感性を育むことが重要であることを示唆していると言えよう。

4 「表現」教育の基礎となる「母の歌と愛撫の歌」

表現とは、自分の内面にあるものを他に伝え、わかちあい、共感を求めようとするものである。意識的なものであろうと無意識的なものであろうと、日常生活の中に現れる様々な表現は、子供の内的世界の反映であり、心（精神）の活動の現れである。そしてその表現方法は必ずと個性的かつ多様性を有するものであり、「表現」教育とは各々の内的世界をどのように育み、援助するのかを考える教育であらう。

現「要領」が改訂される以前の六領域の時代において、それぞれの領域の中から子供の「表現」に関わる活動を取りあげ、実践的保育を提示した渋谷氏は、「表現」の教育について次のようにまとめている¹⁷⁾。

1) 人間は、「運動する」ことなしに、自分の思想や芸術を創り出し、伝達し、さらに自分の認識を深める行為

を生みだすことはできない。幼児も、「運動する」ことを充分に行わせることなしに、知的なもの、情動的なもの、意志的な面で、価値あるものを獲得させ、それをまわりの人々と伝え合い、成長発達を促していくことはできない。

2) 表現の教育は、しなやかに発達する脳、感官、神経組織、筋肉の共同作用の調和的発達をめざす教育である。

3) 表現の教育は、お互いの豊かな人間関係の中で、何かの新しいものを、つねに生き生きと生産しつづける教育である。

4) 表現(力)の教育は、イメージの教育である。

さらに、「表現」教育の方法として、手の機能がとりわけ心の発達と深いつながりがあることを取り上げ(モンテッソーリを引用)、自らの手を使っての遊びをふんだんに取り入れる活動を用いている。

表現の教育と言えはすぐに芸術の分野における表現法を指導することへと移行するのではなく、表現そのものの意味を理解し、全人的な精神の育ちを重視して扱われることが基礎であり、それはフレーベルが意図した内的世界の生命活動そのものの教育と一致する。とりわけ、フレーベルにおける感覚教育が五感(感官)の他に予感を含む総合的な感覚を大切に取り扱うことによる人間教育であることを想起し、内的世界をより豊かに育み、情操や精神といった感性の教育への意図的働きかけである点に着目すれば、フレーベルの「母の歌と愛撫の歌」で象徴的な意味あいをこめて取り扱われた内容や方法から学ぶ点が多いと考える。

結びとして

フレーベルの「母の歌と愛撫の歌」は、感覚教育の中に予感に満ちた象徴的な仕方では乳幼児を外界認識へと導き、神によって統一され支配され安らう生の理解と世界理解にあった。感覚の中でも予感を重視し、無内容の形式的な感覚訓練は子供にふさわしくないとして、乳幼児におけるおぼろげで情感的な認識作用を意識化させるものである。「無意味なものは何一つとして存在しておらず、人間的能力の最も単純な訓練が同時に、意義深い象徴なのであって、その行為のなかで世界のより深い理解がなされるのである。このことは子供においては明白な意識をもって考えられているのではないにしても、それはより深い層において予感されて、のちに明白に展開され得るものである。」¹⁹⁾こうした意味において、保育の世界における手遊びや身体遊び、感覚的遊びの実践は、そ

の形式的活動以上の価値を持つものとなり得るのである。そして表現の教育は子どもをまるごと捉えた内面的世界の感覚的・情緒的な精神と触れ合う教育と言い換えることもできよう。

最後に荘司氏による「母の歌と愛撫の歌」についての評価の言葉を添えて、この書を多くの人に味わってほしいと思う。

「フレーベルはこの中で個々の教育原理や教育規則を母や保育者にあたえようとしているのではない。それは全く浪漫的な精神で詩や歌、絵や遊戯を通して、母や保育者が無意識のうちに乳幼児の四肢や身体をきたえ、心を育て、精神を強めるように仕組まれている。それはまた母や保育者が、この書を読むことによって、幼いものの心を美しく純粋なものとして成長させ、嵩高なものへ向上させることのできるような詩や歌に満ちている。それは全く芸術的な香りが高く、フレーベル以前の誰もが生み出すことのできなかった、教育史上最もユニークな特色をもつ母や保育者のための教育書である」¹⁹⁾

〔注〕

- 1) フレーベル全集では「人の教育」と訳されているが、荘司雅子が先に翻訳したものについては「人間教育」となっている。本稿では、ランゲによって編集されたもの(1966)を中心に翻訳された「フレーベル全集」を参考にしており、それに従った。
- 小原国芳 荘司雅子監修 フレーベル全集 第二巻「人の教育」玉川大学出版部 1986
- 2) 前掲「フレーベル全集 第二巻 人の教育」p.11
- 3) ドイツ・ロマンティック哲学については、荘司雅子著「フレーベル教育学への旅」日本記録映画研究所 1985 p.79~102を参考にした。
- 4) 前掲「フレーベル全集 第二巻 人の教育」p.12
- 5) 一般には1840年6月28日が幼稚園創立日と考えられているが、この日は「一般ドイツ幼稚園」(保母養成のための機関)の創立日であり、フレーベルはすでに1839年から幼児教育を始め、1840年5月1日から「幼稚園」と呼んだ。
- 6) 前掲「フレーベル全集 第五巻 母の歌と愛撫の歌」この書の絵は、フリードリヒ・ウンゲル(1811~1858)の手によるものである。またそれぞれの詩には、曲がついており、作曲にはローベルト・コール(1813~1811)があたった。
- 7) これは「母の歌と愛撫の歌」についている副題である。

- 8) 前掲 「フレーベル全集 第五巻 母の歌と愛撫の歌」より「初めての子を見つめる母の感情」p.15
- 9) 前掲 「フレーベル全集 第五巻 母の歌と愛撫の歌への指示」p.256
- 10) 前掲 「フレーベル教育学への旅」p.144
- 11) ルソーは「エミール」のなかで、「私たちのうちに最初に形づくられ、完成される能力は感官である。それ故それは最初に開発されねばならない」と述べ、感官の訓練を詳述している。さらに共通感官として第六感官をあげている。「世界教育学選集第1巻」明治図書 1967, p.196
また、ペスタロッチは「直観」の訓練をすすめることこそ人間教育の基礎があることを提唱した。ヘルバルト著「ペスタロッチの直観のABCの理念」玉川大学出版部、に詳しい。
- 12) 浜田栄夫「予感能力の覚醒」「自己世界の構築と予感」；「乳幼児の教育」No.21, 22, キュックリヒ記念財団 1983参照。
- 13) 前掲 「フレーベル全集 第五巻 母の歌と愛撫の歌への指示」p.256
- 14) 前掲 「フレーベル全集 第五巻 母の歌と愛撫の歌」p.42
- 15) 前掲 「フレーベル教育学への旅」p.156
- 16) 前掲 「フレーベル全集 第二巻 人の教育」p.33
- 17) 渋谷伝「幼児期の音楽と表現」音楽之友社 1982
- 18) O.F.ボルノウ「フレーベルの教育学」理想社 1973 p.204
- 19) 前掲 「フレーベル全集 第五巻 訳者まえがき」p.7